

アイヌ語研究の現状と展望

Luncheon Linguistics
(2016年12月21日 東京外国語大学語学研究所)
奥田統己 (札幌学院大学)

1

これまでのアイヌ語研究のフィールド調査 1

- ・それぞれの研究者がフィールド調査をして得た資料が中心
 - ・多くは調査者の個人蔵となってきた
- ・フィールドデータがあれば「一国一城の主」になれる／た
 - ・原著論文のデータとするのも資料として公開するのも自分のペースでできる／た
 - ・調査時のさまざまなエピソードも自分の解釈にもとづいて提示できる／た
- ・フィールドワークは楽しい
 - ・「フィールドワーク＝理論＝ピクニック」(※)
 - ・⇔「フィールドワーク＝ピクニック＋理論」
(日本語学会第153回大会公開シンポジウムでの下地理則氏の発表より)

2

これまでのアイヌ語研究のフィールド調査 2

- ・個人蔵／未公開のデータに基づく研究成果
 - ・観察の妥当性は？体系・類型的予測との整合性で判断？
 - ・現データ（音声）と文脈は調査者の管理下にある
 - ・フィールド調査資料は誰のものか（調査者個人／機関／言語研究者／アイヌ民族／語り手個人／「地域コミュニティー」／人類？）
 - (※最近一部で主張される「アイヌ社会のしくみとしての地域コミュニティー」は、多くの場合近年になって行政と一部の研究者が対象を固定するために作り出したものであることに注意)
- ・(日本の?) (言語学の?) 慣習だった？
 - ・「自分のデータを他人に見せるなと先生に言われた」(田村すず子(2000)「危機言語の記録と資料提供の必要」『危機に瀕した言語について 講演集1』)

3

これまでのアイヌ語研究のフィールド調査 3

- ・実際はこれまでの研究者も調査資料の公開を進めてきた
 - ・村崎恭子(1976)『カラフトアイヌ語』(国書刊行会)
 - ・田村すず子(1984-2000)『アイヌ語音声資料1-12』(早稲田大学語学教育研究所)
 - ・「先生のお考えは間違っていた」(田村, 2000)
- ・公開されている資料の多くは口頭芸芸テキスト
 - ・テキストの外の文脈から独立しプライベートなどを含まないで公開しやすい
 - ・調査時の状況、本文確定の過程のやりとりなどは未公開
- ・議論の流れによって都合のいいデータ／エピソードをそれぞれが出すことは可能(「昔は違った」「俺はすごいデータを持ってる」)

4

人文科学の他の分野での調査データの扱い

- ・考古学(奥田の聞き取りデータによると笑)
 - ・かつては表採／発掘した人の個人蔵
 - ・現在は(拾得物>国庫>)なんらかの公的機関蔵へ
 - ・発掘報告書が先、論文は後(または報告書と同時)
 - ・未報告の資料を議論の場に出す:「チラリズム」とされる
- ・歴史学(公文書アーカイヴズによる研究の場合)
 - ・「所属機関の所蔵資料を用いて個人研究や著作発表を行う場合、その資料を利用できる条件や範囲は、一般利用者と同じでなければならない」(ICA「アーキビストの倫理綱領」)
 - ・日本の前近代史では個人の研究者から出てこない史料も多いらしい(奥田の聞き取りデータ)
- ・その他の分野では？

5

フィールド調査資料アーカイヴズとアイヌ語研究

- ・筆記のみの調査資料(フィールドノート)は比較的早くからオープンアクセスになっている
 - ・金田一京助ノート／知里真志保ノート…
 - ・音声がない
 - ・調査の文脈は(プライベートを含め)けっこう含む
- ・録音調査を継続してきたいくつかの研究者の調査資料(音声&筆記&その他)が近年になって公的研究機関などに寄贈された
 - ・「研究者アーカイヴズ」の構築の機運
 - ・たぶん今後も同じケースは(奥田の死後などに)発生
 - ・他の地域のいわゆる危機言語でも

6

「楽しいフィールド」としてのアーカイヴズ 1

- ・「フィールド」は屋外とは限らない：実験室も文書館も
- ・研究者の残した調査ノート・テープ・草稿類
- ・本人が活かしきれなかった一次情報を多く含む「宝の山」
- ・それだけではなく文献学的な興味をそそる
 - ・資料相互の密接な関係が、調べると見えてくる
 - ・どのテープがよりオリジナルに近い（「善テープ」）か
 - ・本文確定や注釈に用いられた後日情報はどこにあるか
- ・個別のデータに文脈を与えていく作業
 - ・（狭義の）現地調査と共通する
 - ・調査者のコメントもアーカイヴズのなかに位置づけなおされて正当な文脈としての意味を持つ：チラリズムを批判的に検証（追体験？）できる

7

「楽しいフィールド」としてのアーカイヴズ 2

- ・整理公開にあたっては遺族・関係者と接触する必要がある
- ・（狭義の）現地へ
- ・文法・語彙調査の可能性にかかわらず想像力が鍛えられる
 - ・「アイヌ語話者の誰々さんの」「うちの婆さんの」現代に伝えたこと／思い出を共有・交換できる
- ・現地調査が話者と研究者の第一世代の共同作業なら
 - ・アーカイヴズはその後の世代の共同作業になりうる
- ・「フィールドワーク=ピクニック+アーカイヴズ」
- ・「研究者／話者／地域アーカイヴズ」
 - ・それぞれがデータに異なる角度からの文脈を与える
 - ・どういう形態で成立するかは個別の事情による
 - ・調査する／される側の共同作業としての性格は共通する

8

アイヌ語物語テキストアーカイヴズから 0

- ・動詞の項の増減に関するさまざまな接辞が知られている
- ・使役：-re/-te/-e（異形態）
- ・使役：-a/-e/-i/-o/-u（異形態）など。主に語根または自動詞からいわゆる有対他動詞を形成
- ・再帰：si-/yay-（この区別には長い研究史あり）
- ・逆受動：i-（人を／ものを）相互：u-（互いを）
- ・部分再帰：he-（自分の頭を）/ho-（自分の尻を）
- ・充当相：e-/ko-/o-（～によって／に対してなど）
- ・充当+部分再帰？：e-（～の頭を）/o-（～の尻を）
- ・he-pun-i（自分の頭-持ち上げる）「頭を上げる」vi.
- ・ho-pun-i（自分の尻-持ち上げる）「立ち上がる」vi.
- ・e-pun-i（～の頭-持ち上げる）「（建物）を建てる」vt.
- ・o-pun-i（～の尻-持ち上げる）「（人）を立たせる」vt.

9

アイヌ語物語テキストアーカイヴズから 1

- ・アイヌ民族博物館（白老町）の「アイヌ語アーカイヴズ」
- ・ネットでは一部だけが公開されているが、館に行って請求すれば（公開可能な部分は）原音声の聴取が可能
- ・織田ステノさん(1901ころ-1993)口演の物語「家の神から呼ばれた女」音声の例
 - ・an-kar pe ka a-o-tek-pic-i-re
 - ・私が-作る もの も 私が-の尻-手-放-す-使役
 - ・o-tek-pic-i-re：これまでの辞書類には出てこない
- ・o-pic-i「～を放す／落とす（<～の尻-を放-す）」は既知。人間が主語、おにぎりなどが目的語。

10

アイヌ語物語テキストアーカイヴズから 2

- ・田村すず子(1997)『アイヌ語沙流方言辞典』草風館
 - ・e-sir-pic-i「はずれる（<～の頭-あたり-を放-す）」vi.
 - ・e-sir-pic-i-re「…をはずす」vt.
 - ・と平行的に考えれば
 - ・o-tek-pic-i（実例は未見）「手から落ちる（<～の尻-手-を放-す）」vi.
 - ・o-tek-pic-i-re「手から落とす」vt. だろう。
 - ・o-pic-iでは「放れるもの」は目的語
 - ・e-sir-pic-i/o-tek-pic-iでは「はずれるもの」は主語らしい
 - ・e-/o-が意味役割を操作する機能を持っているのか、pici「放れる」の意味の対称性によるか、両方か
- （※当日の発表スライドの最後の一文は資料の裏付けを与えられないチラリズムのエピソードなので割愛します。）

11